

平成21年 6月12日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17600027
 研究課題名（和文） 教育、医療、福祉の場における芸術の役割に関する
 調査・研究－芸術と社会の関係性－
 研究課題名（英文） This research is on the function of the Arts in the fields of
 education, medical treatment and welfare. -the relationship between the Arts and Society-
 研究代表者
 森田 実穂（MORITA MIE）
 京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
 00368060

研究成果の概要：

教育、福祉、医療の場における芸術の役割を探求した本研究成果として、学校教育における造形芸術教育環境の悪化がみられ、福祉、医療、精神医療においても、機能回復に重点をおいた造形活動が多い点を調査結果から導出した。それを改善する創造的で能動的、自由な自己表現を可能とする造形教育学習プログラムを、上記分野において、地域の市民への芸術普及活動、環境や自然科学との融合の観点も含めて開発し、実践をおこなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,400,000	0	1,400,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	390,000	3,890,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：表象芸術

キーワード：芸術教育、芸術学、芸術社会学、環境、自然環境

1. 研究開始当初の背景

本研究は、教育、医療、福祉の場における芸術の役割を探求ものであるため、下記では、その各々にそって記載する。

（1）教育：学校現場における造形芸術教育は、文部科学省作成の学習指導要領により実施されており、その趣旨は生徒の個性を生かした多様で創造的な活動をしていくために、その基礎となる感覚・感性や創造力、技能などの資質・能力を一層育てることを重視したものとなっている。教師にとって、この造形芸術教育の支援やその学習内容、また生徒にとって、その支援や学習はどのようなものであるかに関して、調査、造形教育学習プログラム開発をおこなう

必要性が存在している。また、本研究では、自然科学教育における芸術の役割に関しても考察をおこなったが、現代社会における環境教育等の必要性のなかで、自然科学教育に芸術活動を導入すればどのような意味で両者が融合し、教育効果も得られるかということを探る必要性があった。

（2）福祉と医療：福祉の現場では、ノーマライゼーションの概念が「福祉関係八法の改正」を経て具体化し、さらに、社会福祉のあり方全体を根本的に変革しようとする「社会福祉基礎構造改革」により、それまでの措置から、サービスの選択という利用者の立場に立った社会福祉制度の改革がおこなわれ、

高齢者、障害者等に関するさまざまな新しい展開がなされている。それらの変化のなかで、高齢者、障害者の福祉現場における造形活動調査の必要性があった。また、自殺者の増加が問題になっている現代日本社会において、何らかの精神的症状を抱える人々や、精神医療にかかる人々が増えていることから、本研究では、特に精神医療の場における絵画活動にも焦点の一つをあてた。

2. 研究の目的

(1) 教育：教師と生徒にとって、創造的な造形芸術活動の支援や学習内容とはどのようなものであるか、調査、造形教育学習プログラム開発をおこない、またそれを実践につなげて、往復的に考察することが目的である。また、本研究ではさまざまな地域で美術館等の施設や個人と協力し、芸術作品としての教育行為の可能性に関しても探ろうとした。芸術家によるワークショップを通じて、どのようにして芸術教育であり芸術活動でもあるような実践が可能なかを具体的に検証することを研究目的の一つとしている。

(2) 福祉と医療：高齢者福祉、精神障害者の福祉や医療の場においては、芸術活動の実践はなされているが、それは高齢者では生活介護、機能回復に重点がおかれ、精神障害者も同様に、精神機能回復に重点がおかれたものとなっている。本研究ではそれとは異なり、より能動的・創造的な、自由な自己表現に関して考察し、また実践をめざした。すなわち、彼らに精神的な豊かさをもたらし、感動がもたらされ、彼らのコミュニケーションを活発化し、生きる勇気と喜びをもたらす普遍的な力を持つことができるという、芸術本来のもつ造形活動の特性を誘導するプログラムを考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 教育：①研究代表者である森田実穂は、学校の造形芸術教育についての研究をおこなう上で、多地域の中学校、高等学校の美術科の教育実習参観期間を中心に、調査、研究し、そこでの実状や課題をふまえて開発した造形芸術教育プログラムを、地域の学校において継続し、実践、検証した。また同時に、学校教育を超えた場としては、児童、生徒、学生、保護者の世代間を越えた500人を対象とした参加型造形ワークショップとして、2年間、大阪のイベントホールにおいて、造形活動内容を創出、実践し、検証した。いずれも学生や地域学校、そのPTAの協力があつた。

②連携研究者である上村博は、市民への芸術普及教育の一環として、特に音環境のワークショップを複数年次・複数地域にわたり実施した。2006年、2007年の秋に、長野県下諏訪町で、また2009年3月には愛知県名古屋市中で、いずれもサウンドアーティストの鈴木昭男氏を講師に招

いたワークショップを行った。参加者は学生と一般の申込者であり、美術館や地元の有志団体、個人が協力した。

③連携研究者である原田憲一と土屋和三は、自然科学教育と芸術との関連を考察するために、以下の三種類の研究をおこなった。第一点目のピンホール写真を用いた研究であり、第二点目の研究として、京都造形芸術大学の水野哲雄教授と福のり子教授が、それぞれ表現ワークショップと芸術鑑賞ワークショップを担当し、大野教授(古生物学)と原田(地球環境学)は、それぞれ三葉虫化石からその生態を復元するワークショップと月面写真から月の成因を読み解くワークショップを担当した。4グループに分かれて行ったワークショップの実施状況は2台のビデオカメラで記録するとともに、4名のTA(大学院博士課程)が各グループを観察し発言を記録することで、受講生の態度の変化を追跡した(以上、原田による)。第三点目の研究として、土屋は、龍谷大学付属の里山において、瀬田北小学校6クラス児童に対して、自然教育をおこないそれと関連させて、造形ワークショップ、アンケート調査をおこなった。

(2) 福祉と医療：高齢者、障害者についての本研究は、森田が、滋賀県の病院内のリハビリセンター及び兵庫県のリハビリテーション専門病院において、障害者、高齢者の作業療法と理学療法に関する継続調査及び、京都、滋賀、大阪、兵庫の老人保健施設、特別養護老人ホーム、障害者授産施設における造形活動調査をおこなった。そしてその中から導き出された内容にもとづいた造形活動実践を継続的におこない、検証した。これに関しても、学生、他大学の社会福祉学科研究室、医療福祉専門学校、病院関係者、数名の高齢者、障害者からの継続した協力があつた。精神障害者福祉に関しては、連携研究者である藤澤三佳が、精神病院の平川病院及び、精神症状を抱える個人に対する、意識調査と造形活動調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 教育：①森田による学校現場における造形芸術教育調査からは、少子高齢社会による学校の統廃合、総合的学習、情報科の設置、観点別評価、二期制の導入、ゆとり教育から学力向上への教育課程の改正等教育制度の変化と教育改革がもたらした原因によって、芸術教育そのものの環境や状況が大変悪化しているという結果が得られた。具体的には、造形芸術教育の授業時間数及び単位数の減少に伴い、ゆとりある学習時間確保が不可能であることに起因し、教師、生徒双方に負担の少ない芸術領域教材への偏重、制作過程の省略、キット化教材の活用が多くみられた。特

に進学校においては、学力向上の必要性に伴なって、芸術教育そのものを縮小する傾向もみられ、生徒は、中学校の美術科の学習を最後に、造形芸術に親しむ機会を持ってないという状況も存在していた。

また文化芸術振興基本法によって予算化されているものが実際の学校教育現場まで降りてこない状況で、教師達は、教材についても少額予算で創意工夫をせざるを得ないことが観察された。さらに、最新の世界の芸術動向と、学校でおこなわれている造形芸術教育には隔たりがあり、これらの問題の改善や解決は、教師の資質と能力に委ねられているといった調査結果が得られた。

教員免許更新制がこの4月から施行され、講習を開講する芸術大学が教師に造形芸術の最新情報や知識、芸術教育の新たなプログラム創出への支援を担う責務は大きい。

本研究において、大学の造形教育を専門とする者が造形教育学習プログラムを開発し、実践したことは、生徒に関心、意欲、創作意欲を向上させ、彼らがこれまでに経験したことがない広い造形活動を経験することができ、また教師にとっても学校教育現場では触れる機会の少ない美術のグローバル化や表現の多様化に対しての新たな認識が生まれ、造形芸術教育のあり方を問い直す機会にもなったといえる。この成果の一部として、教職課程学習プログラムを、(本学通信教育部、通学部)の教職課程の学生対象に)地域の学校において、学生の造形教育実践により今後も継続する。それは、また大学教員が教育課程、教師へ支援をおこなうという展開や大学の地域貢献としての役割も果たす結果ともなった。さらに、2年間の社会貢献造形活動プロジェクトにおける児童、生徒、保護者、学生間の世代を超えた人々との造形活動に関しては、それを通じたコミュニケーションの相互影響プロセスの考察を中心に報告書にまとめた。

②また、上記の上村による市民への芸術普及教育に関する研究成果としては、ワークショップ実施に際しての指導的人物のふるまいと参加者間のコミュニケーションのとり方についての知見が得られた。本研究では複数のワークショップを時期と場所を違えて実施したが、いずれを通じても効果的さらには必須だった要素として、次の3点が挙げられる。まずは、ワークショップを担う人物の技術の高さである。つぎに、特にグループの中心として活動の指示を行う人間とその他の参加者が、相互に理解を深めるための時間的余裕である。最後に、場の特性への鋭敏な感受性である。あらかじめ決められたプログラムを実行するというより、その場そのときの偶発性を積極的に利用することで、参加者の時間の共有感は増した。各々の場所で個々の参加者が自分なりに特別な聴取地点を探しだし、その場所を鈴木昭男氏と参加者とともに再訪、

追体験する、という単純な活動であるが、鈴木氏の話術と、楽器演奏により、日常的な音の聴取の姿勢から徐々に参加者が離れ、やがて全員が耳を澄ますという行為に熱心になっていくプロセスは、感性教育の格好のモデルともなる。

③原田による上記の「3. 研究の方法」に記載した第一点目の研究結果としては下記のとおりである。芸術教育の分野ではさまざまなワークショップを開発し、教育に適用して成果を上げてきたが、そうした教育技法が初等教育における理科教育に応用されることは無かったので、本研究で、予察的であるとはいえ、芸術的なワークショップを教育現場に導入すれば、予想以上の成果をあげる可能性が高いことが実証された意義は大きいと言える。第二点目のピンホール写真に関する研究に関しては、その理科教育への導入の意義付けについては、2007年および08年のピンホール写真芸術学会年大会で講演した。実験用に撮影した写真のうちの2枚は、2007年5月10日～6月6日、prinz(京都市左京区田中高原町5)を会場にしたPin Hole Lover(さまざまなジャンルのアーティスト、デザイナー、学者によるピンホール写真展)で、「近いのち、遠いのち」と題して展示した。同4枚は、2008年8月1日～15日、「ピンホール写真芸術学会 会員作品展」(紋別市立博物館別館:まちなか芸術館)で、「高原の朝」という題で展示した。また、そのうち2点はピンホール写真芸術学会誌2号に掲載された。土屋による上記研究は、子どもにとって、説明を受けて頭から理解するにはむつかしい自然教育は、例えば自ら採集した葉の葉脈をスタンピングする芸術ワークショップを通じて身体を通じて、また楽しみながら体得されることが結果として得られた。

(2)福祉と医療:高齢者福祉においては、生活介護、機能回復に重点をおいた造形活動が多く、高齢者の自由な自己表現として生きる勇氣と喜びをもたらす普遍的な力を持つことができる芸術本来のもつ造形活動はほとんどみられないという状況が調査結果から明らかになった。その原因は、生活介護支援者不足に加えて、造形芸術の専門職が支援者として就業していないことによるところが大きい。

感性と創造力豊かな高い造形芸術技術をもつ者が高齢者や障害者の個別性を踏まえ、造形活動を誘導すると、彼らの自由な自己表現として、また彼ら間のコミュニケーションが活発化し、つかの間であっても生きる勇氣と喜びをもたらす効果があることが、その造形活動時間や作品からも検証された。精神福祉においては平川病院絵画教室という、自由な自己表現が約36年間も続けられている例を参与観察及び資料から検討しその要因をさぐったが、造形教室内での指導者と彼らのコミュ

ニケーション、合評会でのセルフ・ヘルプグループ的なコミュニケーション、鑑賞者や支援者の共感的なサポートが彼らに表現する喜びを与え、自己肯定感をもたらしていることが知見として得られた。それは造形活動をおこなう当事者にとっても意義深いし、また、鑑賞者にとっても老いや障害、病などを抱えた人々の生の多様性を知ることができ、社会にとっても新しい価値観を生み出すきっかけの一つとなっていることが研究結果として得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

森田 実穂、2009 年、日本教育美術学会誌『教育美術』292 号、pp. 114 - 120、「多世代の交流による参加型造形ワークショップ」査読有

森田 実穂、2008 年、京都造形芸術大学紀要『GENESIS』12 号、pp. 206-225、「多世代の交流による参加型造形ワークショップ—こども未来創造プロジェクト さわやかチャリティアートフェスティバル」査読有

森田 実穂、2006 年、京都造形芸術大学 芸術基礎教育センター Art-Basic Studie ドキュメント、pp. 26-29「多世代の交流による参加型造形ワークショップ」査読有

森田 実穂、2006 年、京都造形芸術大学紀要『GENESIS』10 号、pp. 164 - 179「多世代の交流による参加型ワークショップ」査読有

森田 実穂、2005 年、龍谷大学・里山学『里山から見える世界』、1 巻、pp. 159 - 171「多世代の交流による参加型ワークショップ」査読有

原田 憲一、2008 年、ピンホール写真芸術学会誌、2 号、pp. 60-61、「スローライフとスローフォト」、査読有

原田 憲一、2007 年、ピンホール写真芸術学会誌、創刊号、pp. 17-23「環境学から見たピンホール写真」、査読有

原田 憲一、2007 年、理科教育 631 号、pp. 36-43「地学を文理融合のトップランナーにしよう」、査読無

上村 博、2007 年、『美術フォーラム 21』、vol. 15、pp. 52 - 55、「芸術作品としての京都」、査読有

上村 博、2006 年、京都造形芸術大学紀要、『GENESIS』、10 号、pp. 124 - 133、「景観の受容と感性教育」、査読有

[学会発表] (計 2 件)

藤澤 三佳、2007 年 9 月 7 日、日本臨床心理学会、

立教大学、「生きづらさを抱える若者の自己表現としてのアート」

原田 憲一、2006 年 11 月 17 日、比較文明学会第 23 回年大会シンポジウム 1、大手前大学、「現代文明の光と影」

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 実穂 (MORITA MIE)

京都造形芸術大学・芸術学部・准教授

0 0 3 6 8 0 6 0

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

上村 博 (UEMURA HIROSHI)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

2 0 2 3 2 7 9 6

藤澤 三佳 (FUJISAWA MIKA)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

0 0 2 5 9 4 2 5

原田 憲一 (HARADA KENICHI)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

9 0 1 3 4 1 4 7

土屋 和三 (TUCHIYA KAZUMI)

龍谷大学・文学部・教授

0 0 2 1 7 3 3 2